

わたしの推し！

投票が始まりました！

この本おすすめコンテスト

in いながわ

一般の部



★おすすめ本の紹介文（全12作品）★
持ち帰り用



12作品の紹介文をお読みいただき、その中から

「あなたが一番読みたくなった本」を一冊選び、図書館内設置の投票用紙に番号を記入の上、投票箱にお入れください。

（投票箱は図書館、日生図書室、移動図書館車内に設置しています。）

皆さまのご参加をお待ちしています！

投票期間：令和5年2月14日（火）～3月15日（水）

★皆さんからいちばん多くの票を集めた本を3月23日（木）に図書館・日生図書室・図書館ホームページにて発表します。どうぞ、お楽しみに！！

みんな
投票しにきてね！



「わたしの推し！この本おすすめコンテスト in いながわ」
ブックリスト

番号	書名	紹介者
1	『暗幕のゲルニカ』	ウサギ さん
2	『一日一生』	S.T さん
3	『雲は友 岸本尚毅句集』	青空が好き さん
4	『ごんぎつね』	ペンネームはなし さん
5	『死という最後の未来』	西昆陽のコスモス畑 さん
6	『13歳からの地政学カイゾクとの地球儀航海』	ねこにゃん さん
7	『冷たい校舎の時は止まる』(上・中・下)	バックビーク さん
8	『ノンタンがんばるもん』	うぴ さん
9	『半島を出よ』(上・下)	リーぶる さん
10	『64(ロクヨン)』	アンダンテ さん
11	『笑い神 M-1、その純情と狂気』	ふ～ちゃん さん
12	『われ去りしとも美は朽ちず』	M.T さん

(書名五十音順)



①『暗幕のゲルニカ』

原田 マハ／著 新潮社 [一般:F Hア]

紹介者:ウサギ さん

パブロ・ピカソの「ゲルニカ」といえば美術の教科書等でもおなじみの名画ですが、それがスペインの町の名前で、内戦状態であったスペインにおいて、他国の軍による無差別空爆を受けた街ということまで知っている人は少ないかもしれません。この絵はモノクロームの色彩で描かれ、高さ三メートル半、幅七・七メートルほどという圧倒的な大きさです。

過去のパートではピカソがパリ万博に出品するための絵画として「ゲルニカ」を描き上げるまでの物語が、現代のパートでは、同時多発テロで夫を失ったニューヨーク近代美術館のキュレーターである日本人女性が、ピカソ展で「ゲルニカ」を展示しようと奔走する物語が描かれています。

二つの時代を行き来して反戦の強い思いを届けてくれます。

読後に徳島県の大塚国際美術館で実物大の陶画を観てはいかがでしょうか。



②『一日一生』

酒井 雄哉／著 朝日新聞出版 [一般:188.44]

紹介者:S.T さん

人は口では、いかにも我が極意を達成したかのように言いがちですが、実際のところ、それらが自らの経験に真に裏打ちされたものになっているか。と自ら問うてみると、何もできていないのではないか、との感想です。

この本は比叡山延暦寺に伝わる「千日回峰行」を二度成し遂げた酒井雄哉師の書です。同行は生半可な修行ではなく、山の峰、谷を命がけでかけ巡り、礼拝を続けるのです。食事、水、睡眠を断ち、法華経を読誦し、不動明王の真言を一〇万遍唱える修行。人はなぜ、このような荒行を続けるのか。以前、体験者の一人が講話で話されたことを思い出しました。その方が言うには、「何もなりやせんわ」の一言でした。では何故と疑問が再び沸いてきます。なぜなのでしょう。その解はこの書には明確には記してはいません。自らの心の奥深いところにあると思うのです。

何回も読み進めましたが、その解を得ず、自らの人生体験を積み重ねるしかない。



③『雲は友 岸本尚毅句集』

岸本 尚毅／著 ふらんす堂 [一般:911.368]

紹介者：青空が好き さん

空を眺めるのと俳句を読むのが好きな私にぴったりの句集を見つけた。句集らしくない軽やかな書名がいい。裏表紙に「雲」の入った句ばかり十五句並んでいるのも興味深い。ノートに写すつもりで借りたのだが、好きな句が多すぎたのと、各ページに二句の余白が心地よく、一通り読んだあと購入した。図書館で借りたものの、気に入って過ぎて手元に欲しくなるということが、私にはよくある。

どの句も言葉は易しいが、心情も景色もくっきり浮かび気持ちよく読める。猫好きな私に嬉しい「猫」の出てくる句も九句あり、どれも魅力的だった。例えば「猫撫でてゐるマフラーの二人かな」の句。季語の「マフラー」が効果的に使われ、この一語で、冬の戸外で寒い思いをしている野良猫に、膝を折って体を近づけ優しく撫でている若い二人連れ的情景が浮かぶ。それだけでなく、その時の二人の会話や心情まで想像させてくれる。こんな空想を、俳句で楽しんでみてはどうだろう。



④『ごんぎつね』

新美 南吉／著 偕成社 ほか [児童:えほん]

紹介者：ペンネームはなし さん

ごんは、いたずらばかりしている一人ぼっちの子ぎつねでした。

ある秋のこと、お百姓の兵十ひょうじゅうが小川でとったうなぎなどを、いたずらごころで小川に戻してやろうとしていたとき、兵十がもどってきて、見つかってしまいました。なんとか、す穴に、逃げ込んで無事でした。

十日ほどたって、ごんは兵十のおっ母の葬式を見ました。そこで、あのうなぎは、兵十がおっ母に食べさせるためのものだったことを知りました。

そこで、山で拾ってきた、たくさんの栗や松たけなどを、何回も何回も、こっそりと、兵十の家に届けました。

この日も、ごんは、たくさんの栗を持って、こっそり、兵十の家の中に入りました。その時、兵十は、ごんに気付き、とっさに、壁に掛けておいた鉄砲で、ごんを撃ち殺しました。この時、兵十は土間にたくさんの栗が置いてあるのに、気付きました。兵十は取り返しのつかないことをしたと思いました。そして、ごんのやさしさに気付きました。



⑤『死という最後の未来』

石原 慎太郎、曾野 綾子／著 幻冬舎 [一般:E 13]

紹介者:西昆陽のコスモス畑 さん

私も70歳代になり、体調不良や物忘れが多くなり、この本を読みました。この対談は2年半程前の事なのに石原さんは、昨年お亡くなりになられました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。石原さんは仏教徒で、「命ある限り自らを鼓舞して輝かせていくしかない。僕はまだこれでもかというくらいやりますよ。そして貪欲に死の実相を探り尽くしたい。この気持ちは幕が下りるその瞬間まで持ち続けていくことになるでしょうね」と語られています。

まさに幕が下りる瞬間までに執筆された「私という男の生涯」を購入してきました。又、クリスチャンであられる曾野さんは、「死ぬのも努めなら、その日が来るまで生きるのも努めなんです。自然な命を大切にし、それ以上は望まない方がよいのではと思います。やはり何か偉大なものが死を含めて采配していると感じるんです。」と語られました。私も曾野さんのように、自然に命を委ねて、「死」を淡々と捉えられるように、今を大切に生きて行きます。



⑥『13歳からの地政学 カイゾクとの地球儀航海』

田中 孝幸／著 東洋経済新報社 [一般:312.9]

紹介者:ねこにゃん さん

おすすめの一冊の理由は、とにかく分かりやすいことだ。登場人物のカイゾクが、高校一年生の大樹と中学一年生の杏の兄弟に説明する形で話が進んでいく。そして、どの章もわくわくする内容である。『物も情報も海を通る』『日本のそばにひそむ海底核ミサイル』『大きな国の苦しい事情』『国はどう生き延び、消えていくのか』『絶対に豊かにならない国々』『地形で決まる運不運』『宇宙から見た地球儀』

ロシアによるウクライナ侵略が始まり、小さな自分の世界のことばかりに関心があった私に、世界に目を向けることの大切さを教えてくれた。六十八歳の私にもである。この本は、大人も子どもも読んだら良い本であると思う。子ども達に考え方において、未来への指針を与えてくれる本であると思う。

⑦『冷たい校舎の時は止まる』（上・中・下）

辻村 深月／著 講談社 [一般:Fツ]

紹介者:バックビーク さん

この本は、作者と同じ名前の『辻村深月』という人物が主人公の学園ミステリーです。雪の降るある日、高校生男女八人が学校に閉じ込められるところから物語は始まります。二か月前にこのクラスで自殺した人がいました。しかし、それが誰だったのか思い出すことができない八人。封鎖された校舎の中で不可解な現象が立て続けに起こります。これは『自殺した人物』の復讐なののでしょうか。

この本のおすすめなところは二つあります。一つ目は、登場人物の視点が変わるところです。八人それぞれの目線から物語が進んでいくので、その人しか知らない気持ちや過去が分かり、とても面白いです。二つ目は、複線回収がすごいところです。何気なく読んでいた文章が、実は真相を解き明かす大きな鍵になっていて、鳥肌が立ちます。終盤のどんでん返しが素晴らしいので、ぜひ読んでみて下さい。結末を知ったとき、あなたは必ず震えます。

⑧『ノントンがんばるもん』

キヨノ サチコ／著 偕成社 [児童:えほん]

紹介者:うぴ さん

“わたしの推し”というより、四才の女の子のお気に入りです。

私は、活字があまり得意では無いので、この絵本を紹介させていただきます。

ノントンシリーズの中で、めずらしく、ひとまわり大きなサイズになっていて、登場する動物たちのこまかな身体の特徴もよく解り、大きなカバさんなどは、迫力があります。

というのは、この話は、ケガをしたノントンが、友だちの応援を受けて、大嫌いな注射を打つのですが、そこに登場するのが、カバさんの看護師さんなのです。

大きな身体で こわそう だけれど、なぜか、あったかくて、“ドーンと任せなさい”的な雰囲気があって、おもしろいです。

対照的に、小さな生き物として、虫さんなども登場するので、このバランスがいいリズムを出しています。

この本を読んで、少しでも、注射に対しての恐怖心が小さくなればいいと思います。



⑨『半島を出よ』（上・下）

村上 龍／著 幻冬舎 [一般:F4う]

紹介者：リーぶる さん

ミサイル。これを飛翔体と言い換えていて良いのだろうか。Jアラートは空襲警報である。この本は以前書かれた作品だが、現在の状況を捉えている。アメリカの核のかさの下でじっとして良いのか。

この作品では、非常事態の日本人の反応が良く描かれていて興味深い。

「その時」日本人はどうすべきか。

ウクライナのように戦うのか。

彼らが半島をでてくる前に考えておかねばならない。卵の値段が上がったことがニュースになることなど小さなこと。

地政学的に日本は三方面の防衛を考えなければいけないことは誰の目にも明白である。



⑩『64 (ロクヨン)』

横山 秀夫／著 文藝春秋 [一般:F3ヨ]

紹介者：アンダンテ さん

県警広報課の三上が、妻と亡骸なきがらの身元確認のため、遠くの警察を訪れる場面から始まる。「身体醜形障害」と称される十六歳の娘は家出中。思春期から容姿に劣等感を抱いていた私は、出だしから物語の世界へ引き込まれ、三上家の行く末を見届けたいと切に思った。

警察小説である。三上は匿名問題とくめいに直面。葛藤かっとうしつつ広報室の改革を目指す中、未解決の少女誘拐事件「ロクヨン」に辿り着く。

特に「もうひとつの誘拐事件」発生後の展開は、それまでの複線回収ふくせんかいしゅうの手際が見事であり、私は夢中でページを繰くった。「ロクヨン」の犯人と被害者が、十四年後の思いも寄らない結末へと導かれていく。

地位や立場ではなく、人としてどうあるべきかを追求し成長する三上。彼の「心に届く言葉」の魅力が人を動かす。登場人物の生き様が心に迫る。事件をめぐって緊迫感きんぱくかんのある警察物語だが、生きづらさを抱える者の心にも、明かりを灯してくれる大作であると思う。



⑪『笑い神 M-1、その純情と狂気』

中村 計／著 文藝春秋 [一般:779.14]

紹介者:ふ~ちゃん さん

昨年末の「M1・グランプリ」をテレビでご覧になられた方も多いと思います。

本書は2001年の第1回から2010年の第10回までの第一期「M1・グランプリ」に挑み、栄光をつかみ取った者と破れ去った者達の舞台裏の人間ドラマが、芸人・スタッフ80名以上の証言を元に描かれています。

第10回チャンピオンの「笑い飯」を中心とした若手漫才師達の赤裸な生態と彼等の持つ狂気と情熱は我々一般人には想像出来ないものがあります。一見華やかな舞台の裏側に食うか食われるかのギリギリの世界があり、彼等漫才師達の笑顔の裏の素顔を知る事が出来ます。本著に併せて文藝春秋社刊の「スポーツグラフィック・ナンバー」の12/22号「M1・グランプリ」をお読みいただければ、彼等をもっと深く知る事が出来ると思います。



⑫『われ去りしとも美は朽ちず』

玉岡 かおる／著 潮出版社 [一般:F777]

紹介者:M・T さん

この本を読みはじめた時、私は、しまったあまり面白くないなあ、すこし落胆していた。

しかし、読みすすむにつれ、登場人物の生き様に、感情移入し、又とてつもないプロジェクトに関わられた一員たちに羨望を感じる。

そしてすべてのピースがピタリと、はまり 美術館が完成する、読書後の爽快感は、なぜかまるで、おとぎばなしの様だと、涙腺のゆるい私は思った。